

Save The Tropical Forests



森の通信

2014. 3. 25



マレーシア・サラワク州の原生林に行く狩猟民・ブナン人の故村長ケラセイ・ナアーンさん（2001年）

by Nishioka

CONTENTS

- People(31) Mitra Insani 財団事務局長の Zainuri Hasyim(ザイヌリ・ハシム)さん……p3
- ウータン総会・講演会報告……p4
- ボルネオ島での最前線にいる C.O.P(オランウータン保護センター) ハルデイさんの講演……p7
- 2014ワン・ワールド・フェスティバル参加報告……p11
- タンジュン・プティンでの出会いと約束……p12
- ハラパン村での日々……p14
- 2013年 第3回ボルネオ・エコツアー旅日記 Vol. 3……p16
- 世界の森林ニュース ・会計から ・会計報告 ・本の紹介(オランウータンってどんな人)

「危うし！タンジュン・プティン国立公園保全」を何度も本誌やHP等で流した。

突然3月5日、タンジュン・プティン公園のブグル地区でのアブラヤシ開発中止[A Win for Tanjung Puting]のメール届く。だが開発が全て停止する訳ではない。

国立公園の地域変更を認めている林業大臣ハッサンは開発寄りだ。大臣になった2ヶ月後に「大統領の意向を抜きに私の意見を反映できる」とモラトリアムについて、どんどん地域の保護策を緩め、モラトリアムにする地域を開発OKとしたのだ。タンジュン・プティン公園も一番最初から保全エリアであったブグルについて、国立公園から除外することを認めるサインを彼がした。PT.BGAの子会社のアブラヤシ企業PT.AMSRがブグルでの開発中止といっても、ブグルはまだ国立公園外に置かれたままである。企業が変わった、突然の方針でまたアブラヤシ開発がないとも限らない。

さらに公園外のアグロフォレストリーを実施のジュルンブン地区の北側に、野生オランウータンが多く出現しているが、この地区のアブラヤシ開発停止の表明もない。ここでアブラヤシ企業の労働者が、一部のオランウータンを殺害していたのだ。全てのアブラヤシ開発停止がないので、とりあえずの「一時的な勝利でしかない」。

2月に緊急集会の講演者・オランウータン保護センターのハルデイ氏は「我々は知事が開発停止を命じ、勝利したと思った。だが資本金のあるBGA社はなんと住民を取り込み、突然アブラヤシ開発を実施し、森の大半を破壊した」と。またハッサン林業大臣は、インドネシアの森林破壊問題のドキュメンタリー映画撮影を続けているハリソン・フォード氏に、「こんなことするなら何時でも国外退去にさせる」と暴言している。この大臣がいる限り、「タンジュン・プティン公園の開発が停止」と思わないことだ。油断したら突然の開発が襲うかもしれない。

私たちが熱帯材使用削減が全国で進み、削減策が進んでいたと思ったが、再度チェックで、進捗が6年前から停止したと判った。これは私たちの油断だった。(N)

【ウータン活動報告】

2013・12・10 ウータン、次年度へ方針等の会議

12・24 『通信ウータン 111号』発送、ウータン会議

2014・1・7、1・14 ウータン会議

2・1～2 ワン・ワールド・フェスティバルに参加、「知っていますか？自然の宝庫ボルネオで起きていることを！」セミナー実施

2・11 ウータン総会、及び講演会「危うし!?オランウータンとタンジュン・プティン公園の保全」報告/ゲスト・中司氏(JATAN)、石崎

2・14-19 近藤、中カリマンタンのタンジュン・プティン国立公園へ。調査、聞き取り等

2・19 「ボルネオ島でのオランウータン保護活動の最前線にいる COP ハルデイさんを迎えて」緊急大阪集会の開催、BCTJ(ボルネオ保全トラスト・ジャパン)と協力

3・5 現地のタンジュン・プティン公園ブグル地区のアブラヤシ開発中断の報入

People(31)save! the World's Forests

2011年国際森林年で「APP社、APRIL社の紙を買わないで!」と訴えた
Mitra Insani財団事務局長のZainuri Hasyim(ザイヌリ・ハシム)さん



(写真・文/ Nishioka)

国際森林年にウータンは、Wetlands Inter インドネシアのヨヨ氏と、今問題になるタンジュン・プティンから FNPF マネージャー・バスキ氏を招いた。当会の兄貴団体の JATAN(熱帯林行動ネットワーク)はゼンさんことザイヌリ氏を招聘。「インドネシアのスマトラはカリマンタン以上に森林破壊が進んだ。原因は紙パルプ製造企業やアブラヤシ企業によるもの。APP社、APRIL社は人権問題、森林破壊、生活破壊をも引き起こしている。とんでもない企業だ!

日本の皆さんは、森林を守ろうとしないこの2社に関係する紙パルプを買わないでほしい。世界の温室効果ガス排出量の約2割が森林減少によるもので、スマトラは大変です。今、森林破壊に対し71ヶ所の村の人々と村落林保全を進めています。今回招聘してくれた JATAN の代表・原田さんに感謝します」とゼンさんは集会で訴える。

が、休憩中は「ガハハッ、ッ」とデカイ声で話すから秘密もできない。裏のない人物は、絶対の好人物なのだ。

ウータン・森と生活を考える会 2014年 総会、講演会 報告

日 時：2月11日（火）13時半～15時 講演会、15時～17時 総会

場 所：中之島公会堂 展示室

2013年活動報告

1. タンジュン・プティン国立公園における「原生種の植林」の支援拡大

(1) パダン・スンビラン地域において 8ha を目標に植林の拡大

・FNPF と原生種の苗づくりと植林活動を続け、ウータンの支援により植林された地域は計 6～7ha に及ぶ。

・12月にパダン・スンビランに重機の侵入を発見したが退去済み。

⇒今後活動を行う際、法的な背景をきちんと把握した上で計画すべき。せっかくの活動が台無しになってしまう可能性もある。Basuki の情報は断片的で分り辛いため一度 Zenzi に整理してもらうべき。（大西）

(2) オランウータンなどの個体数、生態地の調査

・5月に石崎、武田が、タンジュン・プティン国立公園地域で生態調査を実施した。

(3) BGA 社の開発計画について、RSPO・世界銀行等に対する申し入れ

・BGA 社に対するキャンペーンを海外 NGO と協同で実施。RSPO11に参加。海外 NGO と BGA 社と話し合い、事務局への申し入れ、ビラマキ等。WALHI の Zenzi と協働でアドボカシーに向け話し合い。

(4) BGA 社についての情報交換、他のアブラヤシ企業の対応・調査

・BGA 社について Basuki や他の NGO とやりとりをして情報を収集。西岡が BGA、他の企業の情報収集。

(5) 「森林再生の苗づくり資金」の立ち上げ

・現地のアブラヤシ農園開発が障害となり頓挫している。

2. 泥炭湿地保全へ調査・参加・日本での PR

・柳原さんが現地住民、FNPF のメンバーと泥炭地調査を実施した。

・泥炭湿地の保全について日本国内で PR をする予定であったが、実施できなかった。

⇒泥炭湿地のみのテーマでは、人が集まらないのではないか。（石崎）

3. エコツアー、「苗づくりプロジェクト」「環境教育」の推進を実施

・エコツアーは 8月に実施した結果 7名が参加した。

4. ボルネオ島の密輸材調査・監視と森林保全へ

・西岡が担当であったが、助成金が取れなかったため訪問できなかった。

5. 合法在推進へ国等への話し合い

・ITTO への各国の対策、レーシー法の進捗状況について確認を継続中である。

6. 新体制、その他

・組織体制が変わり、石崎が事務局長、西岡が代表となった。

・事務局メンバーが忙しいこともあり、内部学習会はできなかった。

・西岡、石崎が学校で講演、ワン・ワールド・フェスティバルで浅田が WS を行った。



2014 年度活動方針

1. タンジュン・プティン国立公園における「原生種の植林活動」の支援拡大

・開発問題の状況を見ながら、引き続き支援を継続する。

2. オランウータン等絶滅危惧種の保全のためのボルネオの野生生物調査

・オランウータンの個体数についてはいくつかの団体が調査を行っているが、数値にはばらつきがある。農園開発、森林伐採、密猟、森林火災が減少の主な原因となっており、いずれは絶滅するとみられている。これら絶滅危惧種の置かれている状況に関する情報を整理し、保全活動に繋げることが調査の目的である。

⇒現地調査を実施するのではなく、既存の情報を活用してウータンのできる限りで国内での活動に活かすべき。そのような情報の活用方法として日本企業に訴えかける。これから実施しようとしている活動がどこに繋がるのか、ウータンができる範囲内の活動であるかということを常に念頭に置くべき。(大西)

3. アブラヤシと泥炭湿地調査

⇒大事なことは一般の人に伝えていくこと。企業・銀行へのアプローチは東京のグループと連携する。(石崎)

⇒昨年度は情報を共有できなかったということが反省すべき点である。一般の方にも情報を発信・共有できるようにすればウータンの本来の活動にも沿うのでは。(武田)

⇒アブラヤシ研究会に参加しているが、アブラヤシ農園開発問題に対しては様々な視点がある。今年度はみんなの認識を確認するための勉強会をきちんとした方がよいのではないか。若い人、普段来られない人も参加するしくみも必要。(笠原)→笠原さんが指揮を執る。

4. エコツアー

・開発の状況、村や FNPF の状況も考慮しながら検討する必要がある。タンジュン・プティン国立公園以外にも、ジャワ島で Wetlands International が実施しているマングローブ植林への参加もうまくいっている。

⇒現状を知るためのエコツアーはこれまで通り続けていく意義はある。安全性の確保が第一。(井下)

5. 違法材調査と合法在推進調査、自治体キャンペーン

・インドネシアからサラワク・サバ州に違法に密輸され、MTCC 認証のラベルを付けられたものが日本にも合板という形で輸入されている。熱帯林材の使用量について各自治体に対してアンケートを実施することで把握することが目的。違法材の輸入を禁止し、熱帯林材から国産材に転換してもらうように働きかける。

⇒具体的な働きかけの内容や、アンケートの詳細項目を事前に詰める必要がある。若い世代を巻き込みながら、情報を共有しつつ進めていくことが大切。(大西)

講演会「危うし！オランウータンとタンジュン・プティン公園の保全」

ウータン・森と生活を考える会 石崎雄一郎

ウータンが長年支援を続ける FNPF とタンジュンハラパン村の村人が活動を続けているタンジュン・プティン国立公園内外での新たなプランテーション開発問題について、問題の経緯の説明と、主に 2013 年にウータンがとってきた対策を報告した。インドネシア/国際 NGO との話し合い、ペティションの提出、WALHI とのアドボカシー、RSPO11 への参加報告、署名集めと提出・デジカメの寄付の報告などを行った。



ゲストの JATAN 中司さん(右)



総会の様子

JATAN 中司喬之さん 特別ゲスト講演会「タンジュン・プティン国立公園における違法な農園開発」

2011～2013年度、「東南アジア諸国におけるプランテーション拡大による問題を、事例分析を通じて明らかにし、日本企業、金融機関、消費者に伝えるとともに、問題改善に向けた提言を行う」目的で、熱帯プランテーション問題に関する調査を、メコン・ウォッチ、FoE Japan、JATAN、RAN 日本代表部、GEF で行ってきた。

中央カリマンタン州にあるタンジュン・プティン国立公園(以下 TPNP)は、東南アジア最大級の泥炭湿地、オランウータン最後の棲息地ともいわれ、1977年ユネスコ生物圏保護区域、1984年国立公園に制定された。

カリマンタンで1990～2010年につくられたアブラヤシ農園の90%が森林地域を転換したもので、中央政府は2015年までに400万ha拡大を予定している。中央カリマンタン州におけるアブラヤシ面積の増加率はインドネシア最大。TPNP周辺では、1994年からBLP社がアブラヤシ農園を造成。2012年より、Bumitamaグループの傘下ASMR社による約9,000haの農園開発が計画されているが、以下の問題点が認められる。

1. 国立公園境界の変更(政府)

TPNPは1996年、2011年、2012年と3回の境界変更がなされた。2011年には、地方政府による農業開発計画(P2R)による農業、畜産が実施されたパダン・スンビラン地域が、コミュニティの主張により、国立公園から除外される予定であった。実際にはパダン・スンビラン地域ではなくブグル森林地域(ウータンもFNPF・村人の植林支援をしている)が対象となったが、国立公園管理事務所によるミスとも言われている。

2. 農園開発プロセスへの違反(ASMR社)

アブラヤシ農園開発のプロセスは、開発事業権(HGU)の発行へ至るまでに、立地許可、環境影響評価(AMDAL)の実施、農園開発許可(IUP)等多くの道のりがある。今回のASMRの開発には、環境影響評価の不実施、開発事業権の発行に先立つ操業の開始などの問題が認められる。インドネシアでは、大多数の企業が贈賄により不当に事業権を取得している現状があり、このケースも該当するかもしれない。

3. 泥炭地域との重複(ASMR社)

インドネシア政府は、2011年5月から原生林地帯・泥炭地域での新たな開発許可の発行を一時凍結する大統領令(森林開発モラトリアム)を出しているが、既存のコンセッション、拡大予定地域は除外されており(対象となる森林の75%は既に保護されている)不完全だという指摘がある。2013年11月にGreenPeaceが、ASMR社によるトゥルクプライ地区での開発の様子を撮影し、泥炭地域・HCVFであることが認められた。

4. オランウータンの殺害(BLP社)

2012年11月に殺害されたとみられるオランウータン、2013年5月に白骨死体が、FNPFによりBLP社のアブラヤシ農園内で発見され、新たな農園開発は、このような事態を一層引き起こすことが懸念される。

○**最近の動向** 2013年10月時点で、ASMR社は既にRSPOのメンバー企業ではないBSL社の子会社に変わっていた。これを責任逃れではないかと指摘する声もある。NGOの働きかけ等により、11月にRSPOから、親会社であるBumitama AgriとしてRSPOに加盟するよう要請があった。11月22日にBumitama Agriは、プレスリリースを発表し、第三者機関による監査が終わるまで操業を一時停止することを約束した。11月26～27日に、TPNP近郊で、政府・企業・地域住民・NGOによるミーティングが開催された。問題の解決を目的としたもの、アブラヤシ農園を地域住民と協同して管理運営すること、国立公園近郊地域での緑化を進めるということで合意が得られた。11月28日に、ASMR社が809haの土地(ブグルと思われる)を国立公園に返還した。2014年1月6日にASMR社が独立した第三者機関による監査を実施した。

○**総括** 本来保護されているはずの国立公園や泥炭地域が、このような開発にさらされていることは重大な問題である。インドネシア各地で報告される土地を巡る紛争の事例は、違法行為、行政による杜撰な管理が原因といえる。開発事業権を剥奪されたアブラヤシ農園企業(カリスタ・アラム社、アチェ州)の事例もある。

2月19日 「ボルネオ島での最前線にいる C.O.P(オランウータン保護センター) ハルデイさんを迎えて」緊急集会 Report

—【オランウータン救助とオランウータン保全する森が必要だ！】—



【野火を起こしアブラヤシ農園を拡大し、迷い込んだオランウータンを殺害する】

ウータンの仲間や多くの大阪の人に会えて大変嬉しいです。とりわけ招いてくださった石崎さんには感謝します。私はオランウータン保護センター責任者のケン・ハルデイと言います。

インドネシアでは2000-2012年に1580haの森が失われました。破壊の1つが違法な伐採であり、アブラヤシ開発です。アブラヤシ企業は森の残っている所で開発しようとしています。それは木を切って売買すればお金が入るからです。そしてアブラヤシを植え販売する。切り開いた所をアブラヤシ開発しないのは、違法に伐採していたり操業していたりして、損害賠償されるのが嫌だからです。インドネシアで「熱帯林が新しい森になっている」と皮肉を交えて言われています。

アブラヤシ開発は重機を使って開発するより、大地に火をつけて一面燃やすほうが多いのです。それは火を入れるほうが安上がりで、早く出来るから。これは法律違反を判っているながら、行われています。

森がなくなれば、オランウータンの生息地も食べ物もなくなります。2004-2010年の私たちが調査・救出した資料・推計データでは約1800頭のオランウータンが救出されました。しかし、オランウータンの子どもを大半救出しており、助かる裏で2-3頭が消され

ている。それはオランウータンが多くの場合、母親と赤ちゃんオランウータンがいることが多いからです。子どもだけ救出できても、まず親のオランウータンが殺されています。2005-2006年に私たちは256頭のオランウータンを救出しました。そこは大半がアブラヤシ農園内です。

生息地が伐採・火災・アブラヤシ開発等で減り、森に暮らす住人であるオランウータンは住処を失い、アブラヤシ農園へも食べ物求めて時々行くわけです。生息地が裸地にされたり、乾燥した土地に来たオランウータンは、アブラヤシへ行き、アブラヤシの茎の白い部分を食べ、水分を得るのです。しかしアブラヤシ企業からすると、オランウータンは「害獣」であり、捕獲・殺害・密売の対象となります。オランウータンの力は非常に強く、人の6倍の力があるので、農園労働者たちはオランウータンを見つけると、鍬で頭を殴り気絶させる。大半は殺す。またオランウータンの頭蓋骨は売れるから販売される。お土産として販売されます。

このような理由でオランウータンの殺害が続いているのです(*1)。やっと最近、報道され出して、この労働者たちが毎週オランウータンを殺害していると分かりましたのです。



[COP の活動]

私たちを含め 5NGO は、より安全な森に移すプロジェクトを始めています。だが、安全な森と思っても数ヶ月でアブラヤシ農園化する時もあります。開発が始まり、オランウータンが発見されると親が殺され、子は販売されるのです。他の動物も同様に密売されるのです。

現在、オランウータンをその地域のアブラヤシ農園から救助した場合、近くの安全な森にオランウータンを移すことにしています。安全な森が近くにない場合林業省に聞いて、どの森が安全なのかを確認し移送する。それも出来ない場合には NGO が作っている森へオランウータンを移します。これには多くの時間と労力が必要です。救助したオランウータンの生活の対応が必要なのです。

1990 年にオランウータンの殺害に対して罰する法律ができたのですが、警察が賄賂をもらったりして、見逃したり実施しなかった。2006-2007 年にも法の実施がされなかった。法規制があるのに上手くいっていない。私は報道関係者であったのですが、法律が守られず、オランウータンが次々と殺害されているから、NGO として団体を立ち上げたのです。

COP は現在 3 つの活動をしています。1 つはオランウータンの救出、2 つ目は地元の人々の組織化です。3 つめは現場での調査です。

ジャワ島の 1 チームは動物園にオランウータンを保護するように依頼し、売買についてチェックをしています。売買等で 2011 年に 5 人が逮捕された。2011 年に逮捕しても刑務所に入れられたのは 2012 年です。メディアに PR してやっと警察も逮捕するようになったのです。PR で「オランウータンを殺

害してはダメ」という状況が広がりつつあります。2011 年に私たちは動物保護に与えられる賞を貰いました。それでモチベーションが上がって活動が広がりました。

COP の活動ですが、私たちは企業の悪い例をまず集めることをしています。そして人々にどのようにされているか、を PR しています。地元の人にも政府、企業により土地収奪・生息地の奪われたことも伝えます。地元住民の声を集め、大臣にアピールする行動もとっています。政府と話し合う機会を作り、オランウータン保護を宣伝しています。企業とも話し合い、オランウータンを殺害しないでと依頼する活動もしています。ベース・キャンプを作り、一方ではアブラヤシ企業の開発に対し、その地のポイントになる地点の杭を抜いてスムーズに開発させないようにもしました。

また資料を集め、メディアに PR します。インドネシアでは不平、不満があっても、法律が機能していないことが多いからです。2011 年の 1 年にメディアの 420 件のオランウータンの記事になったことが大きく、地元だけでなくインドネシア全体にアピールすることが出来ました。地元の人々は、あまりオランウータンを守るという気風がなく、PR しています。

最近、森林警察が協力的になってきた場合が多い。オランウータンを殺害・売買した容疑で 25 人が逮捕されましたが、刑務所に入ったのはたった 8 人。裁判の判決までの道のりが遠すぎるのです。私たちはオランウータンを殺害したら、もっと罪が重くなることを期待しています。



[中カリマンタンのトゥンバン・コリンの森で一度停止のアブラヤシ開発中止]

次にブミタマ・アグリ社のケースについて話します。ブミタマ・アグリ社は、今タンジュン・プテイン国立公園で大問題になっている PT.BGA 社の親会社です。

この企業は急成長したインドネシア企業の 1 つです。銀行から多くの金を借りて、ブミタマ・アグリ社はアブラヤシ農園を拡大しています。インドネシアの銀行だけでなく、HSBC(香港・上海銀行)や日本の東京三菱 UFJ 銀行からも融資を受けています。

中カリマンタンでは大きな問題を起こしています。2007年に14頭のオランウータンを森に返したのですが、その森が切られてしまいました。トゥンバン・コリン地区ではPT.NTU(ナバティンド・カリヤ・ウタマ社)がアブラヤシ農園をしていましたが、ブミタマ・アグリ社が2012年に買収したのです。そこには、オランウータンだけでなく、マレーグマ、ギボン、スローロリスなど希少動物が11種おり、鳥類が54種住ん

でいました。

COPは、2007年2月にトゥンバン・コリンの森を守るため、キャンプを設置しました。13000haのうち7000haの森を切られたからです。地元民と私たちの活動で、とりあえず6000haは切られず、伐採とアブラヤシ農園拡大はSTOPしたのです。同年11月までにオランウータン214頭を移動させ、5頭を救出しました。アブラヤシを植えた所にゴムの木を植え、住民との協力関係を築きました。住民は土地の防衛をすることが目的でした。しかし、大きなゴムの木を植え、彼ら住民が使用している土地とPRしてきましたが、企業の土地に植林したため軋轢もありました。とりあえずアブラヤシ農園は、私たちの大きなキャンペーンで、中カリマンタン県知事は拡大中止を命じました。森の破壊が停止し、一時、私たちは大きな勝利を手に入れたのですが、、、。

[ブミタマ・アグリ社のトゥンバン・コリンの森での殺戮・農園の拡大]

インドネシアでは国が土地の大半を所有しています。しかし、企業は最近、国から土地を買っています。アブラヤシ農園や伐採は大半レンタルですが、取得するケースも増えています。昨年2013年から法改正され、企業に渡すことが難しくなりましたが、企業・個人は最大400haまで買うことが出来ます。土地所有書を持っていないと負けます。マレーシアは大半レンタルだそうですが、インドネシアでは借りることもできるが、買うことも出来ます。

企業が森を手に入れると、生態系が壊され、住処が激減し、大惨事となります。そのようなことで、オランウータン保護とトゥンバン・コリンの地区の一部に木を植えることで、住民が土地を利用していると主張する行動も起こしていたのです。

しかしブミタマ・アグリ社は資本金が多くある。2012年末に、住民をたぶらかして、6000haの大半をアブラヤシ農園にすることになりました。つまり「6000haの大半を農園にして、300haのみをオラ

ンウータンの居住地とする」と。この開発に反対しました。企業はアブラヤシ農園を造成していきました。

私たちは1頭のオランウータンの子どもを救出しました。しかし指が3本切り落とされていました。既に母親オランウータンは殺されていました。もう1頭の子どもは脱水で死亡しました。このようなこともあり、私たちはインドネシア各地の都市でオランウータン保護キャンペーンを行いました。政府と業界に通報し、RSPO 事務局に苦情申し立てを行ったのです。事件は未解決で、ストップしています。

今トウンバン・コリンでは 6000ha の大半の森がアブラヤシ開発で壊され 300ha の森となり、50 頭のオランウータンしか生息していません。森の中で多くの殺害もありました。しかし誰も捕まっていません。特に賄賂をもらっている警察もいるので、

をつけねばなりません。

2012 年、COP は大きなキャンペーンを実施するので、大きな企業から提訴されました。法的手段を考えるため弁護士が必要で、1300ドルほどの費用がかかっています。訴訟や法執行は非常に時間やお金がかかり、軽い刑しか課されていないのがインドネシアの現状です。

私たちは、FNPF、ARI (国際動物保護センター)、BOSF (ボルネオ・オランウータン・サバイバル基金)、Rainforest Action Network、JATAN (熱帯林行動ネットワーク)、ウータンから多くの協力・支援を頂いて今後も行動していきます。

それは最前線の事件を止めていかなければならないからです。今後とも日本の皆様のご支援をよろしくお願いいたします。

(文責・西岡良夫)



(※1) オランウータン研究者・久世さんによると、「以前東カリマンタンの広大なアブラヤシ農園で 100 頭近くのオランウータンが殺害された」という事件もあるということです。

「2014ワン・ワールド・フェスティバル参加報告」

浅田 聡

去る2月1日（土）及び2日（日）に大阪国際交流センターで開催されました「ワン・ワールド・フェスティバル」にて、ウータンもブース出展とプログラムでの参加をしましたので、その内容を報告します。

第21回目となる今年のワン・ワールド・フェスティバルでは、2日間で17,500人（1日目7,500人、2日目10,000人）もの来場者があり、ウータンのブースにもたくさんの方々が訪れてくださいました。



ブース内では、主に違法伐採やアブラヤシプランテーション開発、そしてウータンがこれまで行ってきたエコツアーなどに関する写真を展示して、ボルネオの熱帯雨林やそこで暮らす様々な生き物たちを守ることの大切さを訴えました。特に今回のブース展示では、N.G.O. F.C.Manis の丸山さんという方が色紙を使って作っていただきましたかわいらしいオランウータンの飾り付けをしたり、特大の募金箱を設置したおかげもあって、多くの来場者の方々とコミュニケーションの機会が得られ、ウータンの活動内容について広く一般の方々に知っていただくことができました。

また、国際交流センター内の会議室では、「知っていますか？ 自然の宝庫ボルネオで起きていることを！」というタイトルでプログラムを行い、23名の一般の方々にご参加をいただきました。プログラムの内容は、まず私たちの身近な暮らしの中でいかに多くのパーム油が消費され、そのことがボルネオの自然破壊とどう関係しているのかということの説明するとともに、ウータンが活動を行っているタンジュンブティン国立公園地域におけるアブラヤシプランテーションの開発とプランテーションの現状等について、ウータンのメンバーや昨年のエコツアーの参加者である加納さんらから説明を行いました。

さらにプログラムの後半では、参加者の皆様にグループ単位でボルネオの自然を守るために日本でできることを考えていただき、発表も行っていただきました。非常に短時間で

はありましたが、いろいろな立場の人々が相互に理解をし合いながらこの問題を解決していかなければならないということと、もっと多くの日本人が関心を持って日頃の生活を見直すことの大切さを共有できたことは、非常に有意義であったと思われま

す。来年のワン・ワールド・フェスティバルでは、是非、皆様も会場にお越しください！



タンジュン・ブティンでの出会いと約束

近藤美沙子

ウータンと出会ってから1年弱、2014年2月15日～18日の4日間、私は初めてカリマンタンの活動地を訪れました。「初めて」と言ってもインドネシアに縁のある私にとってタンジュン・ブティン国立公園エリアに入るのは2回目。ただ、以前は観光客としてリバークルーズを楽しんだだけだったので、今回「調査」という名目でいったい何を見て、誰と出会うのだろうとワクワクしていました。しかし、現地での開発問題、FNPFの活動、村の生活、等々、全てにおいて背景知識不足で出発した私は、どちらかというと期待よりも大きい不安を抱えてジャカルタに降り立ちました。

当初は14日にカリマンタン入りの予定でしたが、13日のジャワ島東部での火山噴火によりフライトが1日延期、出鼻を挫かれた気分でした。唯一の慰さめが、FNPFカリマンタン代表のバスキが期を同じくしてジャカルタにいたため、カリマンタンまで同行してくれることでした。ところが、家庭の事情で休む暇がなかったというバスキはどうしても体調が優れない様子。そんな時でも私を気遣い笑顔で接してくれるのが彼の尊敬すべきところですが、私の不安は解消されないまま飛行機はパンカランプンに到着しました。

今回の滞在では、FNPFとプランテーション反対派の村人グループと一緒に植林やアグロフォレストリー（農林複合経営：自然に近い状態で複数の作物を栽培することにより持続的な生産を実現し、森林を再生させる農法）に取り組んでいる活動地（パダン・スンビランとジュルンブン）とハラパン村にそれぞれ1泊ずつしました。

まず初めに訪れたパダン・スンビランでは、FNPFと村人グループ合わせて20人ほどが集まりミーティングが始まりましたが、ここでさっそく、バスキの雄弁を見せつけられることになりました。「FNPFスタッフを降り、グループの活動に専念したい」というある村人スタッフの発言から始まり、「それはまだ最終決断じゃないだろう？」と止める別のスタッフとのやりとり。全員が暗くなるような話題でさえも、バスキが口を開くと全く逆に方向転換する様でした。「グループに専念することはいいことだ。なぜなら、グループはFNPFよりも大きくなるべきだからだ」「グループはFNPFの下にあるんじゃない、FNPFはグループの側についているだけだ」などと力強く語るバスキの態度、そして彼の言葉に熱心に耳を傾けている村人の様子からは、FNPFと村人の活動についてまだ詳細には知らない私にすらも、彼らの熱意や強い信頼関係を感じ取ることができました。鼓舞された村人からは「私達は他人の下にいることに甘んじたりしない！」という勢いづいた発言もあり、バスキがどれだけ他人を勇気づけることに長けているかが分かりました。



スピーチで私を圧倒させた勢いも束の間、まるで直後に降り出した冷たい大雨が予兆であったかのように、バスキが体調不良で倒れ、町の病院まで運ばれました。その際の村人みんなの連携や、「自分の息子のようで辛い」と泣き出すおっちゃん・おばちゃん達を目の前にして、私はミーティング中にバスキが繰り返し強調していた「私達みんなは家族だ」という言葉の意味を再確認しましたが、彼を見送った後の私は、再び大きな不安に襲われました。

そんな私のアシストをしてくれたのが、3月からバスキに代わって FNPF の現地マネージャーを務めるというアドゥ。私と同年代の若手でスタッフ歴は1年余りであるものの、ボランティアとしては8年以上も FNPF に関わっています。バスキを師匠として仰ぐ彼は、その熱意と思いやりをしっかりと受け継いでいるようでした。村やジュルンブンなど色々な場所を案内してもらいながら、FNPF の活動について、村との関係について、人生について、等々、語り始めるとノン・ストップでした。バスキ以外のメンバー全員が村人である FNPF。村ではプランテーション反対が少数派になっているという話は聞いていましたが、アドゥから「自分が生まれ育った村で、みんなから嫌われることをどう思う？」と問いかけられた私はどう答えてよいか分かりませんでした。それでも彼は、長年バスキの対話術を観察しているためか、仲違いしていた両親とも話し合い、プランテーション賛成だった両親を、今では中立の立場を取るところまでは説得することができたそうです。しかし、まだ多くの村人はプランテーションの脅威を理解していないとアドゥは言っていました。「みんなは目先のお金しか見えていない。問題を理解しようと努めていないからだ」

カリマンタンで最後の夜を過ごす私のもとに、入院していたバスキが帰ってきてくれました。「まだ話してないことが沢山あるからね」と、青白い顔に元気のない笑みを浮かべて。彼らと完全に打ち解ける暇もないうちに開発問題について質問攻めにするなんて、しかもこんなに疲れている相手に対して、と気が引けたものの、「このままでは帰れない」という思いからバスキに沢山質問をしました。理解できないところは何度も聞き直しながら。彼は根気よく、私が「分かった」という顔をするまでゆっくり説明してくれました。きっとこれまで何十回も、いやもしかしたら何百回と説明してきたことかもしれないのに、嫌な顔一つせずに。

正直、今回は自分がどれだけ何も知らなかったかということを確認するための旅になってしまいました。後ろ髪を引かれる想いで、「次はもっと勉強して帰ってくる」と心に誓いながらバスキと堅い握手を交わしました。そして「絶対に戻ってきてね」というみんなの言葉を背中を受けながら、タンジュン・プティンを去りました。森を、そしてそこに暮らす生き物、人々をここまでも近く感じた経験は初めてでした。帰りの飛行機で涙が止まらなかったことは言うまでもありません。



ハラパン村での日々

F.C Manis (マニスファンクラブ)
代表 マルヤマサチコ

1998年、スマトラ島 Bukit Lawan(ブキットラワン)の森を自由に闊歩するオランウータンと目と目が合った瞬間体の中を電気が走り抜け、すっかり彼らの虜になりました。「オランウータンを広く知ってもらいたい。」との思いから2007年オランウータンのキャラクター「マニス」が誕生し、子どもたちにマニスを使ったオランウータンと森の大切さを伝える環境教育を行っています。

2013年8月半ばから約ひと月半、JICA「はじめの一步プログラム」の助成を受け、初めてハラパン村に滞在しました。今回の滞在は石崎さんに現地コーディネートをお願いし①子どもたちが環境保全を持続して行く事を目的とした環境教育を行うための事前調査②ハラパン村の住民が国立公園と共存し生計向上を目指す住民主体のコミュニティー作りを行うための事前調査③FNPFと連携確認の3つを目的としていました。

村での滞在はFNPFが子どもたちの環境教育をするために建てた「子どもたちの家」(現在は小学校の先生をしているティニの家族が管理している)にホームステイさせてもらい、毎日朝早くから元気な子どもたちと共に過ごしました。

①の事前調査は主にマニスを使った環境造形教育を行いました。まずはじめは子供たちに編みぐるみのマニスを紹介し反応を見ました。子供たちはマニスがおランウータンだとすぐにわかり、絵本やアニメーションのお話を通してマニスに強い興味を示しました。子供たちの中には絵本の中の登場人物と自分の姿を重ね合わせ感情移入する女の子も見られ、ぬり絵やモビールの作品作りを通してより愛着を持って接するようになりました。オランウータンやチンパンジーの写真集を見て自分たちと同じ種類の生きもの(類人猿)であることを認識し、植物を採取して絵を描いたり、自画像を描くことで個性と創造力を育むきっかけ作りが出来たと思います。子どもたちは、手先が器用で創作意欲もとても強く、ハサミやカッターなどの道具を上手に使いこなし、かぎ針編みのワークショップでは目に涙を浮かべながらも、最後まで根気よく作品を制作していました。



これからも彼らの周りにある素晴らしい自然環境を守るために「隣の森に棲む毛むくじらの大きなサル」という認識から、進化を共に歩む愛すべき隣人であり貴重な財産である事を学ぶ手助けをしたいと思っています。



皆で協力して板を切り、釘を打ち、ペンキで色を塗って村のおみやげ屋の看板作りをしました。子どもたちの要望でマニスが描かれハラパン村らしい看板が出来上がりました。看板を設置した後の写真撮影では、皆とても満足した笑顔をしていました。



子どもたちとお土産屋さんの看板作りをした数日後、村のメインストリートに並ぶお土産物コーナーにも新たに「SOUNENIR SHOP」の看板が登場しました！子どもたちを通じて村の中に良い相乗効果が生まれた事をとても嬉しく感じました。



②の事前調査は、ハラパン村の事を知るため、村の地図作りと村人の調査を行いました。アンケートを作成し、ティニ先生の協力を得て時間の許す限り一軒一軒訪問しました。みな快く応じてくれましたが、ある家に行った時「お前はFNPFの犬か？」と聞かれ、そう思って私を見ている村人がいたことに初めて気が付きました。「私と彼らは仲間だけど、私は自分の意志でここに来ている。」と正直に答えると納得してくれたのか、翌日から笑顔で挨拶をしてくれるようになった事がとても印象的でした。調査の結果、現在村には57世帯約200人が暮らしており、職業は従事者が多い順にプランテーション、公務員、自営(店)、植林、農民、大工、手工芸作り、スピードボート、クロトック(観光船)運転手、ネーチャーガイドとなっています。この結果を受け観光要所にありながら国立公園に関わって収入を得ている住民が少ない事がわかりました。住民の意識を森林保全に向けるには国立公園と共存して住民が収入を得る事が重要だと考えています。その為、村人の手工芸品を売っている村営のお土産屋の活用は重要だと思いますが、店を管理をしている村人が他に仕事をしているため、いつも店が閉まっており観光による収入を逃していることが、とてももったいないと感じました。

村に滞在中、何度か西洋人の支援団体を見ました。支援者の姿が見えた瞬間、我先に支援者に群がりペンやめりえ、ノートなどを奪い合う子どもたちの姿とその様子を写真に収める支援者の行為に違和感を覚えました。またある時は、西洋人をリーダーとしたジャカルタからの視察団がテレビ取材と共に小学校に来校し、先生方には多額の寄付金を、子どもたちには段ボール10箱程の本や教材を寄付していました。視察団が帰った後、先生方が札束を数えている姿に凍り付きました。オーストラリア政府が建てた中学校、滞在中村で行われていた道路の舗装、栈橋工事の公共事業など、村には思っている以上に様々な事が関与しているのではないかと感じました。

滞在4日目、村で年に一度の安全祈願を願う共食儀礼が行われました。村人全員が協力し魚や鶏、揚げ物などの料理、二台の社、ご神体作りをし、皆でご祈祷を捧げた後社を神輿のように担ぎ男のご神体を載せた社は村のはずれの森の中に、女のご神体を乗せた社は村の中を流れる川向こうに安置しお祈りを捧げていました。いつからこの儀礼が行われているのか聞く事が出来ませんでした。神輿のように社を担いで練り歩く様子が日本の祭りや似ていてとても興味深い体験でした。



一年間、ここに安置される社。この隣には、去年安置された社がありましたが、原型は留めていませんでした。さすが熱帯雨林。土に帰る速度が速いですね。



FNPFと共に植林活動をしていたアミールが、10月1日脳梗塞で亡くなりました。クマイで行われた葬儀に参列させて貰い、最後のお別れの前には、お顔を見せて頂く事が出来ました。アミールは生前同様、穏やかな優しいお顔をされ、まるで眠っているかのように見えました。ご冥福をお祈りします。



③今回の滞在で全面的に協力して頂いたFNPFのスタッフ。今後も活動の連携と協力をお願いしました。

浅田 聡

みなさん、こんにちは。第3回エコツアー旅日記の最終回です。今回は、ハラパン村を後にしたツアー一行が最後のジャカルタで過ごした内容を報告します。ハラパン村をモーターボートで出発した一行は、一路パンカランプンの空港からジャカルタ行きの飛行機に乗り込み、最初の経由地であるジャカルタに戻ってきたのでした。



ハラパン村での生活を体験してしまったツアーの参加者たちは、最初に訪れたジャカルタがこれほど都会であったのかという様子で、空港からの景色を眺めていました。

空港からジャカルタ市内のホテルに到着すると、早速みんなでショッピングセンターに出かけました。普段、日本にいるときは何も感じない普通のショッピングセンターでしたが、この時は、何か文明社会の象徴のようにショッピングセンターが感じられました。



それは、たくさんの品物が並べられているショッピングセンターが、物に頼りすぎている現代社会のシンボルのような存在として見え、ハラパン村での生活と大きなギャップを感じさせたからでした。

さて、一夜明けた翌日、今度は現地 NGO である Wetland International Indonesia のニョマンさんに案内されてマングローブのプロジェクト地に向かいました。



ホテルから現地のツアーガイドが用意したバスに乗って目的地を目指したのですが、なんとバスのエアコンがホテルに来る直前に故障してしまい、車内は猛暑のサウナ地獄。窓を開けようとしたのですが、開けることのできない最悪のバスで、一行は不満に思いながらも2時間近くの苦難をひたすら耐えるしかありませんでした。（やれやれ。）



ようやくの思いで目的地に到着した一行は、まずニョマンさんの案内で現地を見学しました。

ニョマンさんの話によると、マングローブには、津波などの自然災害が起きた時、防波堤の役割をして海岸や人々を守るという重要な役割があるそうで、薪や木炭、そして建築資材などとして人々の生活に役立つ他に、その生態系の中で、魚介類や鳥類など数多くの生物を育む「生命のゆりかご」としての大切な役割もあるとのことでした。(すごい!)



ニョマンさんは、このプロジェクトを世界中に広め、地球規模での環境保全に役立てたいと意気揚々に話してくれました。

見学が終わると、ニョマンさんが用意してくれたマングローブの苗木を参加者全員で植林をして、近くのレストランで休憩を取りました。

特に、バスの中でのサウナ地獄と、強い日差しの下での植林を体験した一行にとって、果実まるごとのココナッツジュースは最高のご褒美(?)となりました。



レストランでの休憩が終わり、ニョマンさんにお別れの挨拶をした一行は、次に日本に持ち帰る土産物を買うためにショッピングモールに向かいました。日本のイオンモールと非常によく似ていて、一日中過ごせそうなくらい非常にたくさんの専門店が入ってるショッピングモールでした。特に気に入ったのは、食料品売り場で買ったマンゴーのドライフルーツで、果肉がたくさんあって、とてもジューシーでした。



土産物を買った一行は、その後日本へ戻るために再びジャカルタ空港へと向かいました。

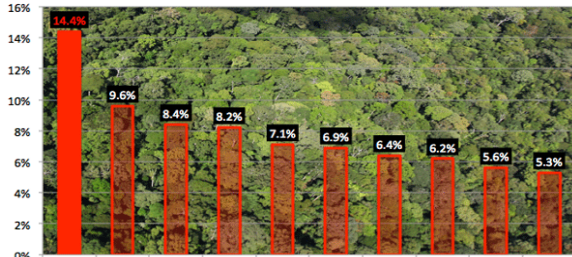
空港では、いつものようにツアーガイドの方と記念写真を撮り、たくさんの思い出と土産物を携えて現地を後にしました。

ツアー終了後、参加者の方々に感想を聞くと、行き際の若干のトラブルがあったにも関わらず、どなたも好評で、結果的にはいつもと同じように非常に有意義なツアーで終わったと思いました。やはりこのエコツアーは、他のエコツアーとは異なり、多くの大切なものを与えてくれ特別なツアーだと思つづく思いました。(See Ya!)



【マレーシア、世界一の熱帯林破壊国】2010-12年

Major forest countries: Highest percentage forest loss, 2000-2012



マレーシア/パラグアイ/インドネシア/グアテマラ/カンボジア/...

Mongabay.com 調査で 2010-12 年の世界一の熱帯林破壊国は 14.4%マレーシア。次がパラグアイ 9.6%、インドネシア 8.4%、グアテマラが 8.2%と(上図)。特にサラワク、サバ州の原生林破壊がひどい。2009 年時点でカーネギー研究所、PNG 大学等の研究者が衛星画像から伐採・森林劣化を算定した調査は、サバとサラワク州は 36 万 4 千 km の道路が巡り、伐採等の打撃を受けた森は約 8 割に及ぶ。残る原生林は最大 45,400km²。「研究で判明は、サバ州、サラワク州の伐採規模は凄まじい。大半 1990 年代からで、皆伐無の熱帯林はマレーシア領ボルネオに殆どない。以前、熱帯林は炭素を貯蔵し多様な生態系を支えた。だが今、油ヤシ農園や伐採林に転換され空洞化。ブルネイは国土の半分が原生林で、保護政策を取っている。2009 年時点でサバ州の未伐採森林は 31%、サラワク州は僅か 3%。85%が森林保全の管理なし」と教授。(資料:2014/2/10)

【違法伐採木材規制により国産合板上昇へ】

日本の違法材を排除の状況をシミュレーションの結果、国産材合板価格は 7.2%、合板用丸太需要 15.7%増加と、FoEJapan、GEF、JATAN がまとめた。法政大・島本教授の協力で仮に「違法伐採木材(または違法性が強く疑われる木材)が日本市場から排除の場合、国産合板価格と合板用丸太需要にどう影響するか」を過去 20 年間のデータを使ったモデルによりシミュレーションした。結果は、違法伐採木輸入が規制されると合板用丸太需要が上昇と。(フェアウッド News2013.11.29) http://www.fairwood.jp/news/pr_ev/2013/131129.html

【マダガスカル新大統領、違法伐採と闘うと誓約】

マダガスカルの新大統領は同国のローズウッド等の違法伐採に対し、違法伐採と闘うと誓約。同材の大半が中国へ。(www.wildmadagasucar.org 2014/2/7)

【世界最大パーム油企業ウイルマー、伐採をゼロに】

世界最大のパーム油取引会社のウイルマー社は、長年非難対象となる同社のアブラヤシ供給網から森林伐採を完全に無くす重大な政策を公約。完全施行されればパーム油産業を一変の可能性も。本当?(資料: 12/5Mongabay.com//wilmar-zero-deforestation.html)

【ブラジル、再度の森林破壊増加へ・生物相の減少】

5 年前より減少を始めたアマゾン森林破壊は、昨年より 28%増加。ブラジル NGO・Imazon 推計は 103%増。ブラジル政府も大幅な増加を認める。また AFP 通信はブラジル野生生物保護局が太平洋熱帯林で息子のジャガーは過去 15 年間で 8 割減少し、250 頭になり、絶滅の危機と。主な原因は、熱帯林 9 割が消滅のため。(資料:2014/1/7Gardian、Imazon と 1/30AFP)

【TPP は環境保護に反すと IUCN 等指摘】

TPP 関連で天然資源保護協議会は、IUCN、シエラクラブ等が指摘。違法伐採は、多くの TPP の国で蔓延し、木材貿易では違法伐採を抑制するため最小限の開示要件と。第 2 は野生生物の違法取引で、国際法の対象となる製品が頻繁に取引と。TPP は環境保護策と反すると報告。(資料:www.chinadialogue.net/2/13)

【FSC、リゾルト社の森林認証一時停止】

グリーンピース報告によると、11 月ケベック・オンタリオ州の北方林 7 百万 ha の FSC 認証を持つカナダ・リゾルト林産会社の認証が一時停止。同社は今後パルプ等を FSC 認証品と表示が出来なくなる。リ社の認証停止は FSC20 年の歴史で最大例。(フェアウッド news)

【アメリカ企業、ロシアで違法伐採で告訴さる】

米国・バージニアガゼッタ社は、事業活動で極東ロシアの保護林から木材を違法調達と指摘さる。大手木製フローリング告訴訟。(資料 2013/12/4 IllegalLogging)

【中国と違法材取引、ミャンマー大損し輸出停止へ】

ミャンマー木材販売業者協会は、毎年違法伐採で 2 億ドル損失が起きると。主にカチン州で伐採され、穴だらけの北部国境を通し中国へ輸出。主な木材はチークで、ミャンマーは 2014 年 4 月 1 日から原木輸出停止すると。(資料:2013/12/4 IllegalLoggingNews と、2013/11/24 新華網など)

<会計より>



井下祥子

会費・カンパをありがとうございます！ 2013.12.10～2014.3.5

池田光司 市井晴也 井下祥子 井下廣 大東弘 奥村知亜子 武田裕希子 地球の友.金沢 三國
浪川光代 西岡良夫 畑章夫 平井英司 平野誠 ペンションふくなが・福永一美 藤岡正雄 藤村はるえ
二木洋子 古沢広祐 吉田千里 渡邊晋 久世濃子 関目実(敬称略)

☆振込用紙をもって領収に代えさせていただきます。

領収書をご入用の方は、お手数ですが、振込用紙にその由ご記入ください。

2013年度決算			
			単位:円
収入		支出	
繰越金	1,002,367	会報製作費	219,765
会費	228,000	事務所家賃	144,000
カンパ(切手カンパ含む)	223,151	送料	77,830
物品販売	1,560	他団体への協賛金	29,710
講師派遣謝礼	35,000	講師・通訳謝礼	75,000
マイチケットより	50,000	会場費	27,440
国土緑化推進機構助成金	850,000	交通費	569,580
公益信託地球環境日本基金助成金	1,400,000	通信費	50,000
講演会資料代	30,500	事務費	38,065
計	3,820,578	海外NGO支援(植林支援)	300,000
		海外NGO支援(交通費)	50,000
		リーフレット印刷代	15,750
		RSPO参加費	90,000
		その他	3,600
		公益信託地球環境日本基金助成金(繰越)	900,000
		次年度へ繰越金	1,229,838
		計	3,820,578

<学習会のお知らせ>

「オランウータン研究者久世濃子さんを囲んで 鹿肉のお食事とお話を聞く会」

日時：3月30日(日) 12:30～食事開始(12:00開場)

場所：ケイズクエナジー事務所(大阪市北区鶴野町4 コープ野村梅田A棟1310号室)

<http://keizoku-energy.com/access.html> TEL 06-7163-2919

費用：2,000円(食事代込み)

*持ち込みも歓迎です！

*学生とベジタリアンの方はちょっとサービス予定♪

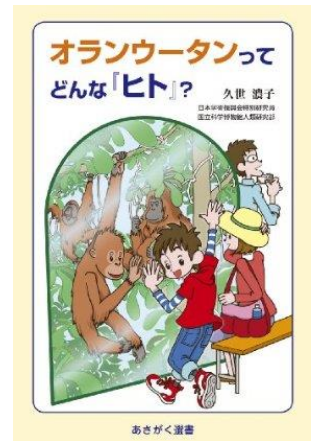
お申し込み：issy@pure.ocn.ne.jp (石崎)までお願いします。

(今回は申し込みが必要です。)

「オランウータンってどんな「ヒト」？」

久世濃子著 朝日学生新聞社 1000円+税

オランウータン保護団体「COP」のハルディさんのお話を聴きました。すみかの森を伐採され、荒地をさまようオランウータンの姿は、胸に迫りました…。



開発で、絶滅の危機に立つオランウータン。一流の研究者が子ども向けに丁寧に書いた本は、大人にとっても最適な入門書です。1項目ごとにまとめ、写真も豊富です。

毎晩作るふかふか絶賛ベッド(雨天屋根付き)や、子育て上手など、紹介したいエピソード満載。大人向けの『野生のオランウータンを追いかけて』(金森朝子著 東海大学出版会)にも著者が登場。研究がこんなに大変とは！

☆ オランウータン野生の生態を長年観察し、日本人研究者としては若くして第一人者に挙げられる著者が初めて書いた本。東南アジアの熱帯雨林に生息し、一生のほとんどを木の上で過ごす彼らが、どれだけヒトに近く、また違うのか。魅力たっぷりのオランウータンの生態。(PRより)

☆在庫あります。ご希望の方は kason@tcct.zaq.ne.jp 井下まで

(またはお葉書にてウータンまでお申し込みください。)



ウータン・森と生活を考える会

【OFFICE】〒530-0015 大阪市北区中崎西1-6-36
サクラビル新館308
「関西市民連合」気付
Tel.06-6372-1561
<http://www.hutang.jimdo.com>

【一部】300円 【年会費】4000円
【郵便振替】00930-4-3880

- 購読希望の方は郵便振替で申し込み下さるか、又事務所までご連絡下さい。
- ウータン定例会は、毎月、第2、第4火曜日7:00pmより「関西市民連合」事務所にて行っております。

PRINTED ON RECYCLED PAPER